# Fate/無明長夜 1 聖杯戦争異聞

世木維生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／無明長夜　１　聖杯戦争異聞

【Ｎコード】

Ｎ０２４１Ｘ

【作者名】

世木維生

【あらすじ】

冬木の『聖杯』。その贋作――――

あらゆる“奇跡”を叶えるという『聖杯』を巡り、７組の魔術師（マスター）と英霊（サーヴァント）たちは最後の１組となるまで死闘を繰り広げる。

# Re：prologue

浜風。

ライトスタンドからレフトスタンドに吹き抜けていくその海風は、この球場ではそう呼ばれている。

その風が一般に言う海風と違う点は、決して穏やかに吹くだけの風ではなく、強く吹き荒び、投球や打球に影響を与えることも多いことだった。

今までこの舞台で繰り広げられた、互いに球史に名を刻んだ投手と打者による幾つもの名勝負。そして、単に試合試合の１つの投打に留まるだけでなく、春夏と言わず行われる様々な大会にも、シーズンを通して行われるペナントレースの行方にをも左右した重要なゲームの勝敗にさえ大きな影響を与えてきた浜風。

しかし、その風が今は、炎天下に晒された身体に帯びた異常な熱を幾分か和らげてくれるものとしての認識しか少年にはなった。

ともすれば。今、自身の達成しようとしている偉業が、その恩恵を受けたものとして。或いは惜しくも達成目前で潰えた要因として。後の誰かに語られる可能性が存在することなど思いもしない。

――――疲れた。もう、辞めたい。

マウンドの少年は、ただ現状、心の奥でそう愚痴る。

しかし、それは完全なマイナスベクトルで構築されたものではなかった。

確かにその言葉は少年の本心には違いない。だが、その実、それは後ろ向きに発せられたものでは決してなく、むしろ逆の方向を目指すための言葉だったのである。

喩えるとすれば、それは弓を引く動作と同じような心理的行為。
より遠くに征矢(そや)を到達させるがために己が総力を持って、弦につがえた矢筈(やはず)を、敵を射抜く鏃(やじり)を、一度は標的から遠ざけるのに似ていた。

それは自らを奮い立たせるために、切り捨てるべきである感情を捨て去るための吐露である。
そうやって、この競技を今日まで行ってきた上で、幾度となく繰り返されてきた精神調整の作業を少年は心底で行う。
ネガティブな感情を殺し、切り捨て。ポジティブな意識で眼前の打者に挑む。
確かに１３０は優に投げきった利き腕は疲労に苛まれ、既に心ゆく投球を可能にするものではない。
初めて立った大舞台の重圧も少年の疲弊を加速させ、倍加させている。
逃げたい。投げ出したい。帰りたい。休みたい。
一方では、先の弱音同様にそれらは少年の紛うことなき本音であった。
だからこそ。己を奮い立たせるために。せめて心を万全へと近づけるべく。
あと一人を抑えるために。勝つために。
それは必要な行為だったのだ。

しかし、果たして――――故に少年は解らなくなる。

この重責とは、この辛苦とは、本当に自分で望み選んだ末の結末だったのだろうか？
だから、往々にして自問する。
此処に立っているべき人物とは自分ではなく、さらには当然の如

く、此処に至るまでの過程で得られた経験は、友人たちは、そういう貴重な財産とは、本来自分が授かるべきものではなかったのではないか？

――或いは。

或いは、何か。

何も残ってはいなかった自分が、本当に情熱を傾けるべきモノが、情熱を注ぎ込んでいたモノが――それとも情熱などという言葉では空き足らず、“固執”とか“執着”とかいう一種、負の感情さえ内包した言葉で括られ心酔できるようなモノが――死を賭してでも得たいというモノが自分に在ったのだとしたら――――

――俺は変わっていたのだろうか？

――否。変わるのではなく、“俺”は白紙に戻る前の本来の“俺”として、今も存在していたのではないのだろうか？

――有り得ない！

――――それは断じて有り得ない！

抱いたのは、己の自我を根底から覆しかねない疑念。しかし、それを認めるわけもなく、そして、それを強く、強く少年は否定した。

過去の自分がどうであったかなど、知り得る術はない。だが、今の自分に自分に対する偽りなどは一切ないと少年は胸を張って言えるのだ。

まして、それを肯定することとは自身を取り囲む環境に対する全否定に他ならない。

また。
浜風がマウンドを吹き抜けた。
天を仰ぎ、忌々しい太陽を一瞥する。それは相対する打者同様、彼の体力と精神力を削る敵なのだ。
大きく息を吐くと、止め処なく額から流れ出る汗を少年はとりあえず手の甲で拭った。
心地よいとは微塵にも思えない只管に不快感を感じさせるだけの汗は、当然、そこだけに留まるものではなく、ユニフォームの下のアンダーウェアを益々ぐっしょりと濡らしていく。
嫌悪感を忘れんが為のように、少年は足元のロジンバックに手を伸ばすと2、3度宙に弾ませた。
そうして、滑り止め利いた指でグラブからボールを取り出し、感触を確かめるように少年は手の中でそれを転がし玩ぶ(もてあそ)。その視線は、ぼんやりと打席の方へと向けられた。

――唯。
――唯、俺には何も残ってなくて。
――唯、これだけしか、あの頃の自分には術がなかった。

否定はしてみたものの、しかし、それは紛れもない事実――。
少年の手に在る硬球は、かつては軟球だったという差異はある。
だが、確かに。少年がその白球を初めて手にしたとき、彼はありとあらゆるものを失っていたのだ。
父を、母を、そして、自分自身にまつわる記憶の全てを無くしていたのである。
顔も名前も知らなかった伯父と伯母と、そんな自分とを新しい家族として結んでくれたのは、その小さな白球だった。
それは事故によって一夜にして両親を、その思い出までもを失くして塞ぎ込んだ少年に伯父が与えてくれたもの。
そして、その白球が繋いだものは、単にそれだけに留まるもので

はない。
最初は伯父だけが相手だったキャッチボールは、気がつけば多くの友達と、目的を同じくする仲間とするものに変わっていったのだ。
野球というスポーツは、当初は少年が外界と繋がる媒介としての意味合いこそが強かったのである。

――――だからと言って、それが否定を肯定するものではないはずだ。

白球を初めて手にした動機が、本当に自分の意志によるものだったという球児が１０割であるはずはないのだ。
縦しんば統計を取ってみたとして、しかし、それが本当に限りなく１０割に等しいほどの大多数で、自分のような異端が極々少数の存在であったのだとしても、だからといって、それで引け目を感じる必要性など全くない。
同時に。
全てを失った自身を護り、育んできた環境があったからこそ、今の“自分”という存在が、今の“舞台”が、今の“幸せ”があると少年は理解している。
そして、ここまでの道程であれ、決して平坦なものではなかったはずなのだ。才能だとか、そんな与えられたものだけで少年は此処に至ったのではなく、至れたのではない。此処に立つためにあれだけの時間を、努力を仲間たちと費やしてきたのだ。
それはくだらない劣等感を討ち払うに十分な骨子であり、それは少年の誇りでもあった。

――俺はここに居ていい。俺はここに居るべくして居る！

晴れた迷いを体現するかのように、力強く少年は白球を握り締める。

視界をずらすと、そこには3塁アルプス席中ほどにある伯父と伯母の姿が在った。
祈るように両手を組み、深く座席に座す2人の姿は、興奮して沸きに沸いているスタンドに於いて異なるものとしてはっきりと認識できる。
過度な期待をせず、実の子のように育ててくれた2人は、今も変わらず見守ってくれていた。

もう不快感も感じはしない。
その心をただ満たすものは、安堵と感謝。

――――少年の精神調整作業は完了した。

精神が限りなくフラットになったのならば、後は放つ白球に在るだけの闘志を込めるだけでいい。打者を打ち取ることに集中するだけでいい。
だから、少年は確信していた。
最後の1人とて自分を打ち崩す可能性は決して無い、と。

投球モーションに入ると同時に全身総毛立ち、異(い)なる何かが瞬間、背中を抜けるような一種おぞましい感覚。体温の上昇を感知すると共に、振り抜く腕が何かに強く後押しされるような感じ。
その後に、その指から想いが乗せられたイメージと共に鋭く放たれる白球。

その投球ができたとき、少年は一度とて打球を浴びたことはなかった。
今。過去、ベストピッチングの際に体感してきたことを、間違い

なく再現できると少年は確信していたのだ。

泥沼のような纏わり抜け出せないような疲労に苛まれながらも、その口元に薄っすらと笑みさえ浮かべて。

灼熱のマウンド上に在る少年は、ゆっくりと、大きく振りかぶる——。

◇

——白球に想いを込める。

それはそう特別なことなんかじゃない。

そんなこと高校球児であれば誰もがやっていることだ。

阪神甲子園球場。

その最高の舞台を目指し、日々練習に明け暮れる。

そうやって僕らは人生を振り返る時に『青春』などという最も貴重な時間の大半を費やして、確実にその小さなボールに想いを積も

らせていく。
投げる。打つ。捕る。
口にすれば単純なそれだけの行動の全ては、たった1球の硬球に集中して行われる。
その1球の産み出すドラマに、一喜一憂しながら。
勝利も、敗北も、喜びも、悲しさも、達成感も、無力感も――――。
全国約7万5千人もの高校球児たちは、間違いなく自分たちのあらゆる想いを、あらゆる意志を白球に込めているのだ。

――――だから、それはみんなと同じ類の感覚だと思い続けていた。

高校での――――。
いや。野球人生の全てが終わった春。

「どうやら私を貴方が呼び出したのは必然だったようですね、マスター」

そう言って突然、目の前に現れた、この世の者とは思えない美しい少女。

「――――問いましょう。貴方が私のマスターですか？」

命の灯火が消えようとする最中、優しく穏やかな声で語りかけてきた彼女と出会い、本当の自分を知ることになるまでは――――。

# Re：1

「本当によろしいのですか？　この神剣を受け取り、召喚の儀を行ってしまえば、もう後戻りできないのですよ？　伊万――」
「――私は里子。有栖川宮里子（ありすがわのみや りこ）です」
暗がりに問う声を――決別すべき名を遮り、そう自らを名乗ったことこそが巫女の決意に他ならなかった。
その巫女装束の少女の表明に、意志を訊ねた束帯姿の妙齢の女性は悲しげに目を伏せ、その背後に控えた背広を着た壮年の男は薄っすらとほくそ笑む。
「――第七百二十九聖杯。そう取り繕われた願望機の争奪戦――聖杯戦争とは、貴女が思うよりも遥かに熾烈を極めます。解っているのですか？」
同じ極東の地にて確認された第七百二十六聖杯――つまりは冬木の聖杯とは、似ていながら異なるモノ。
冬木の聖杯と違い、考察するまでもなく、その特異性や限定性故に、聖堂教会からすれば早々に贋作の烙印を押されて然るべきそれは、しかし、未だに女性の語った通りに“第七百二十九”と認識番号を頂く。

『願望を叶える』という事実。

それは、ただその一点のみによる識別結果のもたした結論だった。
「晴歌（はるか）先生。ご自分の立場を理解されていらっしゃいますか？　貴女も私と同じサイドの人間のはずだ。わざわざ里子様の御心を乱れさせる様な真似をして、一体どういうおつもりですか？」
低い声が室内に響く。女性を窘（たし）めたその声は平静なものだった。だが、男の持つ威圧的な雰囲気は、余すところなく言葉とともに伝わる。

「塚下さん。よいのです。陰陽頭（おんみょうのかみ）の発言は、ただ私の身を案じてのこと――

ご安心ください。それに何があっても私の心は変わりません」

陰陽寮（おんみょうりょう）陰陽頭・土御門（つちみかど）晴歌（はるか）。

宮内庁参事官・塚下（つかもと）博昭（ひろあき）。

それが巫女と共にいた二人の人物の身分と名前だった。

晴歌の所属する陰陽寮とは、占術や暦作成により皇族の公務スケジュール作成の補佐を行い、また、陰陽道の魔術を行使し、呪的にその身辺警護の一端を担っている政府機関である。陰陽頭は、その機関の最高位に在る役職であり、陰陽寮に所属する魔術師――陰陽師たちの頂点に立つ者だった。陰陽寮はかつて中務省（なかつかさしょう）の一つとして公に存在していた機関であるが、現在は非公式の機関である。

そして、宮内庁も言わずもがな皇族の国家事務、国事行為にあたる外国の大使・公使の接受に関する事務、皇室の儀式に係る事務を司る政府機関であり、つまり両名は裏と表という立場は違えども、天皇家を補佐する役人だった。

ならば、その有栖川宮里子という少女は――。

杜（もり）の静寂は、その中に設けられた社（やしろ）を夜闇と共に包んでいた。

社という建物は一般的なイメージとして歴史を感じさせるものだろう。しかし、その社は決して古い建造物ではなかった。

新築とまではいかないものの、その歴史は浅く、築年数など高が知れているだろうことは専門家でなくとも外観から楽に窺い知れる。

それは晴歌の言った“聖杯戦争”という闘争のために用意された土地と建物だったのである。

この街でも有数の霊地であった場所に公共事業という名目の免罪符を用い、かつての住人たちを強制的に立ち退かせ、築き上げた社であると同時に砦であり、そして非公式の御用邸（ごようてい）でもあったのだ。

その地下に設けられた一室。

3人の人影が在るだけのがらんどうの室内は、しかし、厳かな空

気で満たされていた。
一つ大きく息を吐くと、里子は眼下に目を遣る。
そこには幾何学模様がそこかしこに鏤(ちりば)め描かれた円形図が作図されていた。
「――いよいよ、なのですね…」
それは決意を呟いた彼女と命運を共にする者を呼び寄せる門――魔法陣である。
「……私の準備はできています。神剣をこれに」
「かしこまりました」
その言葉を待ち兼ねていたと表情で語ると、少女の声に従い、一歩、一歩と博昭は彼女の元に足を進める。
持っていた白い絹に包まれた細長い物体を、大事にその両手で献上するべく運ぶ。
魔法陣を門だと喩えるのならば、その神剣こそが鍵だと形容されよう。

門と鍵と、そして扉を開く者と。

陰陽寮と宮内庁。それはその両組織が画策した計画(プラン)の根底であり、根幹でもある。
「――里子様。一度(ひとたび)聖杯戦争が始まってしまえば、私を始め、陰陽寮も直接的なサポートを行うことはできません。死闘にはお一人で立ち向かわねばならないのです。本当によろしいのですね？」
博昭が自らの横を過ぎた矢先、晴歌はもう一度だけ少女に決意を問うてみた。
それは自らの、自らが率いる組織の無力さを認めるが故の問いかけに他ならなかった。

考え直すならば、今よりないのだ。
少女がその儀式を完了させてしまえば、以降、彼女は同じく聖杯

を欲する者たちとの凄惨たる争奪戦を繰り広げなければならない定めにあるのである。

邪馬台国（やまたいこく）。
その女王、卑弥呼（ひみこ）が遺したとされる願望機。
西暦でいう２３０年頃に君臨していた彼女の遺品。それが突如と、この夏川の街に姿を現したのは２００年ほど前のこと。
１８００年近い長きに渡る沈黙を破り、冬木の聖杯に呼応したかのように世界に顕現した、その聖杯『らしき』ものは完成に至るまでに、何故か、やはり冬木の聖杯と同じのルーチンを欲していた。

――――即ち、あらゆる願いを叶える聖杯を得るために、聖杯に選別された７組の魔術師（マスター）と英霊（サーヴァント）が最後の１組になるまで殺しあうという儀式を必要としたのである。

その聖杯『らしき』ものは、しかし、冬木の聖杯と異なり、明らかなる特異性を有していた。
過去２回。２００年前、１００年前の争奪戦に於いて検証された、その特異性とは、この日本という国、その極東の極一部の狭小な地域に於いて崇められた英霊のみしかサーヴァントとして召喚されないという点であった。

聖杯とは神の血を受けた杯。
つまりはキリスト教における聖遺物。
しかしながら、そのキリスト教の聖遺物であるはずのものから、関連性の極めて希薄な存在にだけしか儀式システムの支配性が及ん

でいないのである。
ならば、それはその官僚の持つ神剣同様に、この国が所有権を声高々に謳っても十分に説得力のあるものであるはずだった。
だが、それができない現実が、晴歌の抱えた葛藤の原因である。

長い黒髪を二つ、両耳のやや上方で結んだアップスタイルの髪型――サブカルチャー的に表現するならば所謂ツインテール――がくるりと動く。
そこにあった晴歌の見た里子の表情は、曇りのない笑顔だった。
「ありがとう、陰陽頭――。でも、その為に私は生きてきました」
博昭に恭しく差し出された神剣を皇女は迷いなく細く白い手で受け取ると、纏われた絹を剥ぎ取り、再び魔法陣へと向き直る。
「――申し訳ございませんでした。里子様」
自分こそが、そのための教育を幼い頃から彼女に行ってきたはずだった。
この時を迎えるため、二人で入念に準備を行ってきたはずだった。
迷いなく死地に赴こうとする弟子であり、妹であり、娘である巫女の背中。そこには陰陽頭が予想だにできなかった、皇女としての誇りと使命と威厳が確かに感じられている。

――――果たしてそれが本当に良しとすべき結果だったのか？

その答えを晴歌は導き出せはしない。
しかし、迷う師に反して、少女には一抹の迷いも見受けられなかった。
晴歌の視線を背後に、里子の唇はゆっくりと開かれる。
その口から発せられるものは、聖杯戦争という一連の儀式の中でも、最も神秘たる神秘を発現させるための言葉だった。
裸身になった神剣を魔法陣に翳（かざ）し、召喚の儀の詠唱は開始される。

「ひふみよ　いむなや　こともちろらね
しきる　ゆゐつわぬ　そをたはくめか――」

少女の声に反応し、魔法陣を構成している線や図形は、ぼんやりと発光し始めていた。

「うおゑに　さりへて　のます
あせえほれけ」

詠唱に合わせ、宙を踊る少女の持つ神剣。
――その神剣の名を天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）と言う。

それは天皇家に神代から伝えられた、三種の神器と呼ばれる宝具の一つ。
世界的にも数少ない“現存している宝具”の一つであった。
その神剣は、不特定多数の英霊から選ばれるサーヴァントを、特定の英霊に指定して呼び出すための触媒として利用されているのである。

――そして。彼女自身の血もまた、触媒だった。

この魔術円も、彼女自身の血を利用し、歳月をかけて完成させられたものである。

「ひふみよいむなやここのたり――」

少女の唱えるものは祝詞（のりと）。
それは神道の言霊（ことだま）――魔術言語。

「ふるべ　ゆらゆらと　ふるべ」

清音で構成された神歌（しんか）『ヒフミの神歌』と十種神宝（とくさのかんだから）の再現秘儀である『布瑠（ふる）の言』。
それにより少女は、場を清め沈め、神気の増幅を図る。

詠唱に呼応して、魔法陣には明らかなる変化を見せていた。
本来目視できるものではない神気――正確には陰陽寮の描いた魔術術式円により変換された魔力が、その奔流が外円に沿い、見る見ると質量のない渦を形成していく。
巫女の千早の袖が、緋袴の裾が魔力風に揺らぐ。

「――朝敵討（ちょうてき）ちし神剣の担い手よ。我、汝と共に剣を取らん」

その魔法陣は陰陽寮の英知の結晶だったのである。
本来、一つではない祝詞の効果を繋げ、増幅し、魔力として変換する。
そして、何よりも。
聖杯戦争において召喚された英霊が分類されるセイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、バーサーカー、アサシン、キャスター、その七つのクラスより、最優とされるセイバーのクラスとして彼の英霊を召喚するために、陰陽師たちが１００年の歳月をかけ研究し、作成されたものだったのである。

「アハリヤ　アソバストマウサヌ　アサクラニ
日本武尊大神（やまとたけるのみことのおおかみ）　オリマシマセ――――！」

招神の秘言（ひごん）。
神降ろしの祝詞が完成すると、陰陽道の象徴とも言うべき魔術記号である五芒星（ごぼうせい）を中央に配した魔法陣は一層、強く輝いた。
――薄暗がりの部屋を唯白色一色の世界へと変える光の暴走が始

まる。
魔力の生み出した渦もまた、一陣、暴風とも形容できるような物理的な影響を及ぼす風を産み、里子を、晴歌を、博昭を襲っていた。

風が抜けると、静寂が訪れていた。
凪いだ空間の中央には、新たな人影が一つ窺える。

「――令呪（れいじゅ）……」
身体に感じられた異変、違和感――その正体。
魔術円の縁（へり）に在った里子の声が沈黙を破った。
令呪とは、サーヴァントのマスターであるという証。
それこそが、召喚の儀が成功したという証明だった。
里子は左手の甲にいつの間にか刻まれていたその令呪から、魔法陣の中央へと視線を動かす。
そこに立っていたのは里子の予想よりも遥かに幼い姿をした、まるで――自分の生き写しのような少年だった。
少年。そう感じることができたのも、自分が召喚した英霊が何者か解っていたから判別できたことである。その知識がなければ彼が異性だとは――いや、別の人物でさえなくドッペルゲンガーだとしか認識できなかったのかも知れない。
そんな自身の呼び出した英霊の姿を前に、驚き、里子は言葉を失っていた。
しかし、その愛らしい姿をした小柄な少年と里子には絶対的な違いがある。
それは威厳に満ちた、その雰囲気。現界した少年は、その身に纏う威光だけで辺りを完全に支配していたのである。

その存在を前にし、晴歌も博昭も呑まれ、ただ立ち尽くしていた。
彼は確かに敬うべき、畏怖すべき、この国の英霊の中で上位に数えられる存在だと、それだけで誰もが理解できていた。

再び訪れた沈黙。
それを破れるのはその英霊だけであり、そして、それを破ったのは、やはりその英霊に他ならなかった。

天叢雲剣の担い手である英霊は里子を威圧的に真っ直ぐと見据え、尊大な口調で問いかける。

「――女。お前がオレ様のマスターか？」

## Re：2

夏川市――。

その街で２００年前に初めて観測された聖杯は既に贋作であると判明しており、本案件は聖杯関連の事案からは疾うに除外されている。

そもそも、その贋作はオリジナルを模したものでさえなく、冬木の聖杯――遠坂・アインツベルン・マキリの作り上げたシステムを剽窃（ひょうせつ）したものに過ぎない。

その贋作の贋作を一言で表現するのならば、“劣化した粗悪品”である。

そのような評価を受けるに至った要因とは、願望機としての不安定さの一言に尽きる。

余談であるが、冬木の聖杯の真なる目的であった外界に出る為の門を開くシステムも、当然、同様に不安定であると確認されている。尤も、この点については、既に我々が関心を抱く問題ではないのだが――。

故に、表向きには冬木と同質の聖杯戦争だと取り繕われているものが終了したところで、勝利者が願う願望の発現には、限定や制限がかかってしまう可能性が極めて高いのである。或いは儀式が滞りなく終了したとて、それは願いなど全く持って叶えられぬ代物かも知れないのだ。

つまり、その贋作はあらゆる願いを叶え得るモノではなく、それを聖杯だと認定することは神への冒涜に等しい行為なのである。

その不安定さを生み出した原因とは、システムを盗用した夏川の

管理魔術師である園埜(そのや)の能力の限界。
そして、夏川の土地にあると考察される。

園埜は中庸なる一族に過ぎない。
確かに園埜は大きな欠点を持ちはしないが、特出して得意とする部分も持たぬ一族なのだ。強いて長所を挙げるとするのならば、冬木のシステムの模写を可能とした猿真似能力ぐらいである。
そんな凡庸な一族が中核を為したのでは、如何に他の優秀な魔術師から協力を得ることができようとも、第二魔法の使い手をも関与したとされる遠坂・アインツベルン・マキリの作り上げたシステムを完璧に再現できることはできなかったのだ。

しかし何よりも、その不完全たる結果をもたらした要因は、土地による影響こそが大きい。
遠坂の土地の霊脈と比較し、夏川の土地における霊脈の流れは外へと開き切ることなく、外部との循環が脆弱で閉塞的なものだったのだ。
その為、システムに霊脈から吸い上げられた魔力が満たされるのには冬木の聖杯よりも多くの時間を要することになる。
結果、その贋作の争奪戦の開催周期は一世紀と、冬木のそれに比べ長いのである。
そして、霊脈が閉じている影響はシステムの管理範囲にも及んでいた。
故に冬木の聖杯に於いては古今東西に縛られることのない英霊の召喚は、夏川の霊脈が問題なく巡っている範囲――日本という国の英霊のみに限定されていたのである。

だが、冬木の『聖杯』よりも、我々にはその出来損ないの『贋作』の方が、遥かに有益であると判断される。

第一の要因として、システムの管理範囲が限定された結果、英霊を現界させるために消費される対価が、冬木のそれよりも安価であるという点である。
おそらく冬木の聖杯に比べ夏川の贋作は、システムの効果範囲が制限されたが故に、システム側が受け持つ英霊の召喚・維持の力が冬木のそれよりも大きく働いていると考えられる。
つまり、端から範囲を限定させて運用することを前提に戦略を考案すれば、英霊と呼ばれる存在を兵器として使役するには、こちらの方が優れているのである。

第二の要因として、システム構造が冬木の聖杯よりも単純であろうという点が挙げられる。
贋作であるそれは、オリジナルである冬木の聖杯に比べ、意図されたものでなく、模倣しきれなかった結果だと思われるがシステム構造が単純化・省略化されていると考えられる。その証明として、完璧に全てのシステムが運用されている冬木の聖杯と比較して、贋作には様々な不安定さが窺えるのだ。
そして、簡易化されているのは、小聖杯とて然り――。
故にシステムを掌握し、その上で解明作業を行うことにより、本システムの転用・移設は十分に可能であるものだと推測される。

第三の要因は、魔術協会の関わりが、冬木のそれよりも悠に希薄であるという点である。
聖堂教会が公然と争奪戦に参戦することは、冬木の聖杯戦争に於いては禁忌に等しい。それは教会と協会の全面戦争さえも招きかねない行為である。
しかし、夏川の争奪戦はそうではない。
名門である遠坂・アインツベルン・マキリと、凡族でしかない園

埜。それはその差にあると思われる。
格式や伝統を重んじる嫌いのある魔術協会に於いて、その二つの聖杯戦争の取り扱いには雲泥の差が見受けられた。
冬木の聖杯戦争は魔術協会に、遠坂・アインツベルン・マキリの三家による魔術の大儀式だとして認識されている。
だが、園埜の儀式は、過去2回の顕然たる失敗という結末も手伝ってか、明らかに軽視されていた。
その贋作のもたらした事象が、自分たちの行った大儀式の結果であるという報告を行ったであろう園埜の話を虚言と判断したのか、それとも園埜のくだらない失敗作の為に聖堂教会と事を構えることを良しとしなかったのか。或いはそのどちらでもなく、何かしらの別の理由や思惑が存在するのか――？
だが、そのような協会の内情など、疾うに我々には関係のないことである。
我々にとって重要なのは、その贋作が『邪馬台国の女王“卑弥呼”が遺した聖杯である』という我々の捏造した情報を協会が一応は容認しており、聖堂教会が公然と、その願望機の争奪戦に参戦できるという事実なのだ。

繰り返すが、夏川の出来損ないは断じて『聖杯』などと公言できる代物ではない。
しかし、我々一派が教会内部の何れにも劣ることのない確たる力を――埋葬機関にさえ匹敵するような力を有するが為に――。
我々一派の繁栄と、それに連なる信者たちの安息のために、それは必要な贋作（もの）なのである――。

◇

ジュリエッタ・カタリナ・アレキサンドラが聞いた、司教自らの口によって語られた報告――と言うよりも、ほぼ半分以上は昔話――は、おおよそ、そのような内容だった。

そして、その報告の後にジュリエッタが命ぜられた尊命とは、その偽りの聖杯戦争への参戦と、第七百二十九聖杯――つまりは夏川の贋作の獲得であったのである。

司教が何故、自分にそのような重要な任を命じられたのか。

その理由をジュリエッタは十分に理解していた。

それは彼女の血にある。

司教は――８代前の彼女の先祖である者は、自身と同じく魔術回路を持つ者を欲したのだ。

基本的には、魔術回路を持つもの――魔術師でなければ、その聖杯戦争には参加することも叶わないのだから――。

その礼拝堂は金や銀の装飾がやたらと目に付く。

それは荘厳であるというよりは、派手でけばけばしいとしかジュリエッタには感じることが出来なかった。

例えその印象は、暗がりに在っても変わることはない。

だからこそ、そこが教会であると彼女は未だに思うことが出来なかったのである。

彼女の生まれ育った町に在るような質素ながらも神聖な空気に包まれた教会と比較すると、そこは教会というよりは寧ろ、その建築様式や芸術性を誇張して建造された閲覧・内覧を目的としたパビリ

オンのようにしか思えないのだ。
「ジュリエッタ――」
蝋燭の灯がぼんやりと照らし出した、そんな暗がりの中にある一応は礼拝堂である室内に響いた声は、彼女と同年代の男性のものだった。
ミディアムボブの淡いゴールドの髪がふわりと揺れたかと思うと、澄んだ碧眼の瞳には、その男性の姿が映し出される。
振り返った先に居た男は、この教会の牧師であり、今回の夏川の”聖杯戦争”の監督役である朝比奈国光（あさひなくにみつ）の息子・光一（こういち）だった。
監督役の役割とは、聖杯戦争に巻き込まれた一般人の治療を行ったり、サーヴァント同士の争いの痕跡を隠蔽したりと、聖杯戦争が円滑に運営されるように裏から手を回すことである。
つまり監督者とは、公平なる立場から聖杯戦争を見守る責を負った者だった。
だが、少なくとも今回の贋作の争奪戦に於いて、監督者とは決してフェアな立場を貫く者ではなかったのである。
それは、彼らも神の使徒として、教会こそが勝利すべきであると判断していたからだった。
また、朝比奈国光はジュリエッタの祖である司教と懇意な間柄であるという。
「――どうしましたか？　コウイチ」
「今、父から連絡がありました。霊器盤（れいきばん）に反応が見られたそうです」
光一は大慌てで、この礼拝堂に飛び込んできたようだ。
ここは都心部に建てられた、婚礼専用の小さな教会なのである。
弘一が控えていた事務室からこのチャペルまでは、そう大した距離はない。それにも関わらず彼が僅かながらも呼吸を乱しているということが、それをジュリエッタに教えていた。
「……ついにセイバーのサーヴァントでも喚び出されましたか？」
最優とされるサーヴァント・セイバー。
その存在は、順当に考えれば聖杯戦争に於いて一番の強敵となる

ことだろう。
しかし、それが召喚されたというだけでは有益な情報というには無理がある。
召喚された順番が解っただけでは、何のアドバンテージにもなりはしないのだ。
だから、光一の慌てようは、そういうことが理由ではない。
光一は、ほんの数日前に顔を合わせたばかりのジュリエッタと、例えどんなに些細な話題であっても会話の取っ掛かりとして利用したいと願っただけなのである。
異性にそう思わせるだけの美貌を、確かにジュリエッタというシスターは持っていた。
しかし、そういう好意を寄せられた当の本人には、その類の感情に生憎と全く関心がない。
だから単純に、現状、その男性からもたらされるレベルの情報で、最も重大なニュースとなるだろうことを口にしただけだった。
或いは監督役である国光に、どこぞのマスターがサーヴァントを召喚するや否や名乗り出てきたというのならば、それは予測の範疇を超えたニュースとなろうものの、そのような好事家など、そう存在するべくもないのだ。
「――え、　……ええ」
そして、それはやはり正解のようだった。
それで会話のネタが尽きてしまった光一は、見る見ると活力を失っていく。
もうこれ以上の会話が続かないことを、彼は理解していたのだ。
ジュリエッタは寡黙な女性。少なくとも光一の認識の範疇での彼女は、そういう人物だった。
光一の口から発せられた『霊器盤』とは、監督者に預けられるアイテムである。それは召喚されたサーヴァントの属性を表示する能力を持っていた。

そのため監督者は、いつ、どのサーヴァントが召喚されたかを知ることができるのである。
聖杯戦争の開戦を知るために、それは必要な魔術道具だった。
「ランサー、キャスター、ライダー……そして、私のバーサーカーに続いて、ついにセイバーが受肉しましたか――」
セイバーで5体目。
そして、これで残るサーヴァントは、アサシンとアーチャーの2体だけとなったわけである。

もうあと僅か。
明日か、明後日か。
どんなに時間がかかろうとも、少なくとも指折り数えられる内には始まるであろう戦争を前に、しかし、ジュリエッタは自身が驚くほど冷静であることを自覚していた。
それは必勝を期すために、司教により準備されていた触媒によって呼び出された英霊が、あまりに強大すぎたことが要因であると理解している。

その英霊は、恐らく冬木の聖杯戦争で召喚されたであろう英雄たちをも加えても、最高ランクの強力なサーヴァントであろうことは想像に難くない。

それは、その英霊自身の能力に因るところも大きい。
しかし、事、この時代の、この場所が戦場である限り、彼女のサーヴァントは常に最高の恩恵を受け続けることを確約されているのだ。

その背後で霊体化状態になって控えているバーサーカーを、ジュリエッタは心底、頼もしく思う。

そしてバーサーカーと自分が、間違いなく勝利することを確信している。

夏川の聖杯戦争――。

贋作たる杯の真相を知らぬ者は、その争奪戦をそう呼称するだろう。

しかし、その杯はジュリエッタにとって単に贋作――その粗悪な模倣品でしかない。敢えて、その紛い物の杯に名を頂くとするのならば、必勝を誓った杯――『誓杯』とでも名付けるべきか。

ならば、その争奪戦は『誓杯戦争』といったところか――。

バーサーカーはホームゲームを戦うわけだが、ジュリエッタ自身には誓杯戦争はビジターゲームである。

もしも自分たちに不安が在るのだとすれば、その一点に尽きる。

光一の予想通りに、ジュリエッタはそれ以上、誰に話しかけることなく礼拝堂を後にした。

扉を開くと、目の前には小さな庭園があり、そのすぐ向こうは大通りである。

東京都心部へのアクセスも容易なこの土地は、夜更けも近いというのに、未だそこを流れる車も人も溢れんばかりに多い。

――懸念材料は時間の許す限り消し去らねばならない。

日の落ちた夜の夏川こそが、これより先、戦場と化すのである。

その様相を知ることが、その不安要素を潰すことが、ジュリエッタにとっては急務だった。

彼女の足は迷いなく外へと向けられる。

足早に宵の前庭を抜けると、その通りに出たジュリエッタの姿は、美しい容姿であることも、長身で妖艶なスタイルであることも、異国の人間であることも、修道服に身を包んでいることも――そのありとあらゆる人目に付くであろう要素全てをもってしても、たちまちに人並みに掻き消され、彼女をエスコートするべく、今度こそ本当に慌てて後を追って来た光一の目に見つかることはなかった。

## Re：3

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

――キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。
時の翁、或いは万華鏡（カレイドスコープ）の異名で知られる死徒二十七祖第四位にして、現存する４人の魔法使いの内の１人。

果たして、その名を少年が告げることに魔術としての意味合いは存在するのだろうか？
一般論で考えてみたとしても、魔術師の常識に照らし合わせてみたとしても、それは極めて無意味なことであり、却ってマイナス因子を孕ませることになる甚だしいまでの愚行と言えた。
夏川の聖杯戦争の起源。つまりは、この呪文より始まる奇跡の連続の総てという総てが借り物であることを誰よりも知る当事者――その盗人の血族に直系の者として名を連ねる少年にとっては、それこそ“冬木の聖杯（オリジナル）”の作製にも関与したとされる“第二魔法”の使い手が崇め奉るべき芳名であろうはずもないのである。
だが、その家系に在する魔術師としてではなく、こと少年個人に限って判ずるのならば、しかし、それは確かに意味のある詠唱と言えた。

――それは、彼女が告げた名前。
――それは、彼女と同じプロセス。
――それは、彼女に紡がれた詠唱。

擬似的ながらも『彼女』と体験を共有するということは、少年にとってはこの上なく貴い価値を持つのだ。
「閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」
詠唱と共に続けられるのは儀式。その経過に比例し、溶解させられた宝石で描かれていく魔法陣は完成へと向かう。
それもまた始まりの御三家の1つである遠坂(とおさか)の魔術師が、サーヴァントを召喚するに当たり行うであろう手順を律儀に踏まえて実践されているものだった。
無論。比較検証をしてみれば、徹底的に分析するまでもなく、細部と言わず幾つもの相違点は容易に窺えた。
寧ろ、それらは違いというよりも粗と表現した方がより相応しい類のものである。
魔法陣を描くのに使用されている宝石などは、それこそ好例の1つであり、その価値には雲泥の差があった。
それは何も資産的な側面だけの差異ではない。そこに込められた魔力の質も量も、遠坂がサーヴァント召喚に際して用意するであろう宝石(もの)と少年の宝石(もの)とでは絶対的な隔たりがあったのだ。
他にも例えを挙げるのならば、それにより魔法陣を作製する技術とて然り、である。
「――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ――」
そもそも、この召喚の儀式も立派な魔術の行使に他ならない。
儀式の――魔術の失敗は少年の命を奪い去ることにさえ、十分に繋がり得るのだ。
だが、そんな危険を熟知した上で、彼は借り物の魔術(ちから)を使用し続けた。
「――誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者――」

否。それこそが少年の、少年の血筋の“本質”なのだ。
それこそが、彼らにとっての“魔術”の在り方に他ならないのである。
「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
そうして果てに、彼の工房に奇跡は成る。
彼の借り物の魔術は、しかし、確かに彼の身体を神秘を顕現させるための装置とせしめて、世界と此の世ならざる場所を繋ぐに至った――――。

宝石により描かれた魔法陣の産み出した、直視を許さぬまでの眩耀（げんよう）。
その凝塊したかのような光源の中心から現れ出でたのは、衣褌姿（きぬはかますがた）の上にごく簡素な軽鎧――古代日本の戦装束に身を包んだ小柄な少年兵だった。
聖杯からの呼び掛けに応じ、現界した目の前の英霊が一体何者なのか――。
その真名を少年は初見で見抜けるわけもないが、しかし、自身の喚び出したそのサーヴァントがどのクラスに配された英霊であるのかだけは明確に理解できていた。
召喚の儀式を行った少年よりも僅かながら背丈の小柄な英雄は、その背に、自身よりも優に長大な鉾を備えていたのである。
もしかすれば、それは非常に解り易い偽装なのかも知れない。
しかし、果たして――
「――聖杯の寄る辺に従い、ランサーの座を依り代に我、参じた。――問おう。汝が我がマスターか？」
マスターである少年の予想に反することなく、彼の英霊は自身が

槍兵のサーヴァントとして現界したものであると語ったのだ。
「ああ、そうだ。ランサー。
――僕は園埜潤（そのやじゅん）。オマエが忠誠を誓い、勝利を捧げるべき主（マスター）だ」
それが少年――園埜潤により口火の切られた此度の聖杯戦争の嚆矢（こうし）。
夏川の第3次聖杯戦争と呼ばれることになる酷く物騒な魔術儀式に於いて、最も早くに契約の成立したマスターとサーヴァントの邂逅の瞬間だった。

夜風はまだ、凍てつくような冷たさをもっていた。
人々は急な季節の逆行に外出を差し控えているようで、緑を湛え始めながらも凍える木々の姿だけがリビングの大きなガラス窓の向こうにはある。
大陸から張り出してきた強い寒気が、間近に迫っていた春の足音を再び遠ざけているのだ。
人影の見受けられない外灯が照らす道路を屋敷から満足げに見遣りながら、もしかするとそういう異常気象とて聖杯のもたらした現象なのではないかと潤は考えていた。
暖かい日々が続いて桜が満開にまで開花してしまえば――
夜桜見物にでも適した夜が続こうものならば――
その存在を秘匿することを何よりも優先せねばまらない魔術による戦闘行為など、安心して行えるものではないのだ。
人気（ひとけ）のない時間帯、人気のない場所が多いに越したことはないのである。もし魔術の神秘が明るみになるような事態が発生しようものならば、園埜の人間は夏川の土地を管理する者として、何をおいてもその隠蔽に奔走せねばならないのだから。
聖杯は本来、誰に邪魔されることなく獲得すべき者――夏川の管理者が管理者としての職務に手を煩わせることなく聖杯戦争に望み、

聖杯獲得にだけ専念ができ、万全に物事を運べるように、その舞台すらを整えようとしているのではないだろうか？

そんな風に思えるのも、潤が三騎士の一角たるランサーという優れたサーヴァントを引き当てたが故だった。

確かに最優とされるセイバーを配下に置けなかったことは残念と言えば残念ではあるのだが、過去2回の聖杯戦争に於いて園埜の一族に配されたサーヴァントはキャスターとアサシンであったのだから、それからするとランサー召喚という結果は十二分に僥倖だったと言えるだろう。

ランサーは契約の後に霊体となって、今も潤の背後に従者のように控えていた。幾度か交わした言葉やその態度から察するに、彼は実に実直で御しやすい英霊と言えるだろう。卑劣な選択を選ばぬ限りは、いつでもマスターである潤の意のままに彼はその強大な力を行使するはずだ。

他にも既にサーヴァントを召喚した魔術師がいるのかも知れない。サーヴァントや、そのマスターの活動に因るものだと思われる事件や事故が発生したとの話は未だ管理者たる潤の元には届いていないが、既に暗躍しているやも知れないのだ。

しかし、今はまだ、園埜が屋敷を構える、この山の手の閑静な住宅街は確かに安寧の中に在った。

もっとも。そんな静かで安全な夜も、僅かな日を数えるだけで容易く打ち砕かれることだろう。

気温だとか天候だとか、外的な条件がどうであれ、結局の処、一度聖杯戦争が始まってしまえば、夜間は一般人にとって危険この上ない時間帯に変わることは間違いないのだ。

この界隈は尚のこと。

園埜の屋敷といえば、明確にマスターとサーヴァントの拠点であると敵に認知されている数少ないポイントなのである。

聖杯を欲する厚顔無恥な烏合の衆は、過去がそうであったように、この一帯こそを聖杯戦争の主戦場の1つとして数えることだろう。

だが、地の利とランサーという手駒を以ってすれば、それらを一蹴し、一族の悲願としてきた聖杯獲得も十分に実現できることなのだ。
少なくとも園埜潤は、それを信じて疑わない。
その思い込みは『彼女』を娶るという淫楽な将来をも連想させ、少年をますます幸福な気持ちにさせるのだった。

◇

“何故（なにゆえ）に聖杯を欲するのか――？”

ありとあらゆる望みを叶えるという願望機である聖杯。
それを求めるが為に、凄惨を極める争奪戦へと魔術師（マスター）たちは赴く。
しかし、それはマスターと共に参戦するサーヴァントたちもまた然り、であった。
そもそも、生前に英雄として崇め奉られ“英霊の座”に迎え入れられた彼らは、人間如きに使役できる存在ではないのだ。
彼らは彼らなりに聖杯を求める理由があり、それ故にマスターに付き従うのである。
聖杯が結んだマスターとサーヴァントの縁とは、決して絶対的な主従関係ではない。両者は聖杯を獲得するために利害の一致した協力関係にあるだけなのである。
サーヴァントが聖杯戦争へ参戦する意図と、マスターが聖杯によって成就させんとする望みと。

その両者が相容れぬ願望（もの）であるとするならば、元よりサーヴァントとマスターの共闘体制は構築されるはずもないのである。

だからこそ、その文言は大きな意味を持つ。

園埜潤もまた、ランサーを召喚した直後に、その問いを己がサーヴァントに投げかけていた。

では、彼はその疑問に対し、自らのマスターにランサーはどのような解（こたえ）を返したのか？

「唯、護国のため――」

僅かばかりの澱みなく。一切の迷いなく。

それが自らの望みであると槍兵のサーヴァントは明澄に語ったのである。

彼は聖杯という計り知れないモノが、悪意ある何者かによって行使されることを防ぐためだけに潤の呼び掛けに応じたのだという。

ランサーとは、かつてこの国の平定と平安を願いながら戦いに赴いた英雄。護国の英霊。

マスターである潤が信じるか、信じないかは別として。

それはその功績により英雄となった少年の形（なり）をしたランサーが、遠い過去から色褪せることなく現代まで抱き続けた純粋で高貴な祈りだったのである。

もしかすると、彼女は選択を間違えたのかも知れない――――。

その望みはまた、マスターである彼女の望みと同じ類の祈りだったのだから……。

勿論。自身のサーヴァントではないランサーが、そのような崇高

な願いを胸に現界しているなどという事実を、彼女が知り得るはずもない。
或いは、『園埜』という間違いなく聖杯戦争で生死を賭した争いを繰り広げることになるであろう魔術師が召喚したランサーという英霊が、自分と互いの願望を尊重し合える理想的な共闘体制を築き上げることのできる人物なのだと知ったところで、彼女が彼をパートナーとして選別することなど疾うに叶うはずもないことだったのである。
園埜潤は有栖川宮里子（ありすがわのみや りこ）よりも1週も先駆けてサーヴァントの召喚し、契約を終えていたのだから。

最優と謳われるセイバーとして現界した、生前、国の平定のために尽力し、貢献したはずの英雄。
セイバーもまたランサーと同様の功を成した英霊であった。
否。彼こそが国土平定の英雄としては最も誰からも伝え知られる人物であり、その貢献度も他を圧倒しているのだ。それこそ里子にとっては一番に協力的で、互いに信頼し合える関係を即座に結ぶことのできる人物であったはずなのである。
「セイバー！」
しかし、実際のところ彼女とセイバーの関係はお世辞にも良好とは言い難いものだった。
それを示すかのように、少女の呼びかけた声にサーヴァントが即座に応える気配はない。
自宅である御所の前は里子の言葉の余韻が消えた後、ただいつもの静けさの中にあるだけだ。
一応は表参道ということにもなる道路から一の鳥居をくぐると、杜の中を石畳が神所へと伸びていた。
「セイバー！」
外部からの参拝者無き社に続く小道を歩みながら少女は再度、己がサーヴァントを呼んでみる。

数基の鳥居が並ぶ境内を、少女は一見、自分自身と見紛うばかりの英霊を視界に探す。
近くにいるであろうことは、マスターである彼女には解る。単に彼が応えないだけなのだ。
「セイバー！」
「――煩いぞ。女」
幾度目かの叫びに、漸く聞こえたセイバーの声。その声音は、しかし、散々彼を探していた少女のものよりも気だるげで、苛立ちを含んだものだった。
そんな反応はいつものこと。
彼は常時、そういう不遜な態度を己がマスターに対して取っているのだ。
いや。それは決して彼女に対してだけのものではない。
そういうセイバーの不埒な言動も、彼女と彼の関係に溝を作る一因なのだった。
しかし、もしかするとセイバーには何か、セイバーなりの思惑があるのかも知れないと里子は思いたかった。
例えば、彼が夢に見た平定後の理想とする国土と、多種に渡る様々な問題を抱えた現代社会とのギャップであったり――。
……もしくは。もしくは皇女として彼と共に戦おうとする、自分自身に対する不信感であったり――。
だから、今、この時までは、そんなセイバーに気を使い、物怖じし、彼女は彼の否定的な反応より先、それ以上のコミュニケーションを取ることができないでいた。
或いは、幼い頃より想い描いていた理想の英雄たる彼ならば、程なく態度を軟化させるものだと、ぎりぎりまで信じていたかったからなのかも知れない。
「……セイバー。貴方はどうして、追行してはくれなかったのですか？」
しかし、最早そうも言ってはいられない状況だった。聖杯戦争の

開戦は目前だろう。それを彼女は確かに感じ取っていた。
その凄惨を極める魔術師たちによる戦争とは、マスターとサーヴァントの意思の疎通が出来ずして勝ち残れるほど浅はかな戦いであるはずもないのだ。
縦しんば、そのような異常を継続しながら聖杯戦争を戦ったマスターとサーヴァントが過去に実在していたのだとしても、少なくともそれは里子とセイバーには実行できるはずもない無理な戦略（はなし）でしかないのである。
だから、意を決して少女は問う。
「……貴方は私を守護する責務を負うはずです」
「――ほう。物申すか、女」
「女ではありません。私は里子。貴方のマスターです」
そんな里子の初めての反応を、さも楽しげにセイバーは嗤った。
サーヴァントに対するマスターの初の反抗に、サーヴァントもまたマスターに対して初の表情を見せる。
「学校に向かうと告げたはずです。どうして途中で私の側を離れたのですか？」
「――ふん。下らぬからよ」
「下らない？　私にだって“普段”はあります！　それにだからといって私の側を離れて、もしものことがあったら貴方はどうするつもりだったのです！？」
里子はセイバーを召喚した夜に纏っていた巫女装束姿ではなく、ダッフルコートにセーラー服という服装だった。
彼女は来年からの授業で使用する教科書を購入するために登校する必要があったのである。
「もしも、とな？」
「他のマスターやサーヴァントからの襲撃を受けるようなことがあったら、ということです！　同じ学校に“園埜”も在籍していると伝えたはずです！」
そして、学校に登校するということは、他のマスターに遭遇する

可能性が高いことを意味していた。
そのマスターとは、今年最高学年に進級する男子生徒。園埜潤と有栖川宮里子の間には、同じ学園に通う先輩後輩という関係が存在していたのである。
園埜の跡取りと同じ高校に通学するということ。
当然、それは諜報活動の一環という側面も持っていた。
彼女は幼い頃からこの街で、この御所で暮らしながら聖杯戦争に備えてきたのである。
確実に件の戦争に参戦することが解っている魔術師に対する様々な情報を収集しておくということは、非常に重要な彼女に課せられた任務でもあったのだ。
「ふん。その様な些細なことを有事だと騒ぎ立てるのならば、その“令呪”とやらを使えばよかろう？」
「セイバー！？　貴方は！」
令呪はマスターに3回だけ与えられた絶対命令権であり、その行使は、時に不可能を可能とする。言わば“切り札”である。
それをただ行動を共にさせるだけに使うなどと――その発言は聖杯戦争を恐ろしくも軽視するセイバーの意識の現われと里子には取れた。
――それは彼女の存在すらを全否定する行為と相違ない。
「――女。勘違いするなよ？」
しかし、柳眉を逆立てて感情を露わにした里子に、セイバーはそれ以上の怒りを――殺気さえも孕んだ怒気を向けていた。
「オレは聖杯などどうでも良いのだと言ったはずだが――？」
言葉を失った少女に、威圧の塊たる存在は続ける。
共闘体制は、そもそも前提として成り立つはずもない。
如何に互いがわだかまりを吐き出したところで、そもそもセイバーには聖杯に賭するものがないのだ――。

「――！　セイバー、貴方はそれを本気で……？」
その言葉を確かに、里子は数日前に聞いていた。
どうして聖杯を求めるのか――？
彼女もマスターとして、己がサーヴァントに確かめたからである。
だが、どうしても信じられなかった。
信じたくはなかった。
「復唱させるか、女？
――オレは只、オレの庭たるこの大八洲（おおやしま）にて、オレに断りもなく下らぬ戯れに興じようとする、下種で愚かなる雑魚共を嘲り虚仮にしてやりたいだけのこと――
そう告げたはずだが？」
しかし、何度聞いたところで、何度疑ったところで、セイバーの答えが変わることは無い。
彼は、本当に、幼い頃から憧れた、共に戦うことになるはずの英霊なのか――？
「そう言う意味では女。オマエは最初に拝むには打って付けの大白痴だったな――」
呆然とするマスターを、セイバーはさも愉快に見下す。
「――身の程を知れ、女。
雑兵如きの器に過ぎた願望など、滑稽を通り越して唯腹立たしいだけだ」
そうして、同じ志を持つ者であると少女が信じていた英霊は、唯、抱いた尊き想いを侮蔑した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0241x/

---

Fate/無明長夜 1 聖杯戦争異聞

2011年9月25日01時42分発行